

学校と父母の信頼関係こそ

問題克服の礎

生活に追われる間に

「非行」、いやな言葉です。字句こそ違え、毎日の様に新聞に載っています。毎日載ること自体、非行は全国津々浦々まで蔓延し、普遍化し、一般化した証と言えます。

私達の神経も二三年前のセンセーショナルな事件ほど、敏感でなくなりました。感覚的に麻痺させられてしまったのでし

ようか。あるいは、全国どこでもそうだから仕方ないやと、あきらめてしまったのでしようか。

いや、決してそうではないと思います。新聞を見るたびに、そして人づてに聞くたびに「何とかならないものか」と心を痛めている方がほとんどと思われる

しかし、これをすれば非行を克服できる——という決定的な解決策は見出せず、そして又、

「学校と家庭と地域が一体となつて」という言葉はよく聞き、

観念としては理解できて、さて今日、明日から何をどの様に

この間にも、好ましくない状況は進行してゆくのです。現に

と呼ばれていたのは数校であつたのが、本年はどうでしょう。何と「良い学校」がほんの少々と言われているのです。

もちろんいろんな問題をを内抱しつつも、関係者のご努力で幸いにも山手中学校は後者に属するに至っている訳ですが……

相互の批判をのり越えて

中学生になつて突然非行が生まれるものではありません。それまでの成長の過程で、子どもが越えねばならない節目を経験せず、伸びる芽を摘まれて大きくなり、それが非行という行為

で現われる……とは、専門家の一致した見方です。様々な要因が重なり合つて、子どもの発達

を歪めている、というわけですが。この様に、問題の所在は多種多所にありながら、父母の側からは「学校が悪い」と言い、先生の側からは「父母・家庭に原因あり」との声をあちこちで耳にします。もちろん、両者批判ばかりでなく、「学校ではもう少しこの様に欲しい」、あるいは「お父さん、お母さん、もう少し何とか」という願望

を表明したものであると考えられるわけですが……。願望がかなえられなくなると、不信感が漂い、本當の批判、非難となるわけです。

今こそ、願いをかなえ、批判をのりこえ、厚い信頼を築く時だと思われまふ。先生と父母が

野などと呼称することとなりました。

明治の合併当時の西阿倉川村は、戸数六三、人口三〇四でありました。同じく東阿倉川村は

一九七戸、九一六人、野田村は四八戸、二一五人であり、末永村については定かではありませんが、川原町は二二戸、八七人で、隣接の鳥居町とともに四日市町へ併合されました。

三、発展する海蔵村

海蔵村は、四日市町の隣接地として明治時代後半ごろから急速な発展をしていきます。

ことに、明治前半に、上島庄助や唯福寺住職田端教正らの奨励により、伊賀焼手法の万古焼陶磁器業が発展してきました。

真剣に論議し合い、そして又、先生は教育のプロとして、父母に積極的に子育ての提言をすべき時でありましよう。

伸びやかな子どもに育てるために、双方の厚い信頼の上に、はじめて父母は先生方の提言を受け入れることができるでしょうし、また父母が学校を支えることも可能になるでしょう。相互の望ましい結びつきが、何よりも先に形成されなければなりません。

幸い、当地域ではPTA活動、あるいは地区懇談会等を通じて相互の信頼は増しつつあると考えられ、喜ばしい限りです。

文責・海蔵地区市民センター 黒宮

四日市港の商業港として活動の場と、陶土の得やすさが窯業の発展を促したといえます。西阿倉川には、四日市レンガ会社が操業したのが明治二〇年代も半ばであります。

明治二九年、旧三重郡と朝明郡が合併して新しい三重郡となり、明治三〇年には、四日市町が市制を施行するに至り、郡役所が村内大字末永に移転し、三重郡の政治の中心地として発展していきました。しかし、昭和

五年には、四日市市へ合併することとなり、村名は消滅してしまいました。

(次号へ続く)



海蔵地区の地名を調べて その2

四日市市教育委員会社会教育課主幹

森 逸 郎

呼称されてきました。ですから、明治二二年海蔵村が成立するまでは、伊勢国三重郡西阿倉川村、同東阿倉川村、同野田村、同末永村、同浜一色村などと呼称されてきました。

各村を統合して新しい村なり

各村々がどうして〇〇村という新しい村を形成するのが妥当であるかという理由書も付されています。

海蔵村については、海蔵川をはさみ、古来、人々の往来が各村々とも多く、一村形成するに

二、海蔵村の成立

日本にはじめて国、郡、里の制度が成立したのは、西暦六四六年の大化改新詔によつてであります。以来、明治二二年四月一日の市町村制度の制定まで国郡、里の制度で村々、各村落が

今回は、海蔵村を中心に、その歴史なり地誌を書いてみました。

町、市にするにあたり、当時の三重県は、町村分合取調書を作成しています。その中に記されているのは、明治二二年合併村当時の各村の人口、戸数、耕地面積、その他が詳細に記されています。その他としましたが、

ふさわしい旨が記されています。しかし、末永の一部や、明治維新以後連合戸長を一緒にしてきた浜一色村との関係が切れていきます。ことに、末永のうち、「川原町」と称されてきた地域は、近世江戸幕府の統治下にあ

の村々は、西阿倉川村、東阿倉川村、野田村、末永村の一部の四村であり、それぞれの村は、海蔵村の大字となりました。従来の呼称、伊勢国三重郡西阿倉川村は廃せられ、ここに新しく三重郡海蔵村大字西阿倉川字上